

## 〔特別展によせて 1〕

## シルクロード あれこれ

東京国立文化財研究所 上野アキ  
名誉研究員

奈良県百年と奈良市政九十周年の記念事業として今春開催される「なら・シルクロード博」に関心が高まっています。関連各国から貴重な美術品が多数送られてきて立派な展示も行われるそうです。恐らくいろいろな角度からシルクロードに光をあてた華やかなイベントがくり広げられることでしょう。それにしても、シルクロードの名がすっかり日本人の間に根を下したことに驚かされます。リヒトホーフェンが最初にこの言葉を使ったとき、その範囲はパミール高原の東、狭義の西域に限られており、のちにヘルマンがシリアまで拡げて考えたのでした。10年余り前にNHKがシルクロードの企画にかかった頃にはまだ中国奥地への旅行が自由でなく、一方ブームに乗って周辺諸地域への旅行者の進出が続いたため、日本では広義のシルクロードがいつの間にか定着してしまいました。

博覧会の始まる頃、当館では、「シルクロードの絵画」という特別展が開かれます。これは狭義のシルクロード、すなわち中国の西端、新疆維吾爾自治区のタリム盆地を囲む南道・北道のオアシス周辺諸遺蹟及び敦煌をとりあげます。

有史以来東西の国々を結ぶ幹線

道路であったこの地域では、紀元前後には中国の漢王朝と匈奴との間でここを確保するための熾烈な争いがくりかえされていました。両者の勢力が後退して西域三十六国といわれる国々が独立し繁栄を誇ったのは大体3世紀頃からです。仏教が盛んで、多数の寺院が営まれ、北道には石窟も開かれました。内部はヘレニズム、インド、ペルシアの影響を受けた壁画で飾られるのに中国の影響も受けます。それらのうち、ミラン、ホータン、キジル、ベゼクリクの壁画とトルファンの出土品及び敦煌の絹絵が春の大和文華館を彩るはずです。

これらの地域は、南道では自然の猛威を受けて砂に埋れ、水を失った人々の移動とともに都市の歴史を閉じたといわれますし、北道では異教徒の侵入によって仏教が衰退したと考えられます。また海上交通の発達に伴って、交易路としてのかつての繁栄をオアシス諸都市は失って行ったのでした。

この地域が再び眠りからさめるのは19世紀後半から、まず地理学者の関心が集中したことに始まります。続いて20世紀初頭にはヨーロッパ諸国から東洋学者による探検隊が次々に派遣されることになりました。この動きにいち早く反



キジル出土 菩薩像頭部

応した日本人が、西本願寺の大谷光瑞だったのです。そのころロンドンに滞在していた光瑞は、帰途自ら西域探検を志してロシア経由でカシュガルまで来ましたが、旅程の都合で果せず、同行の渡辺哲信、堀賢雄を探検のため残して、インドに向いました。1902年9月のことで、第一次大谷探検隊のこの二人は、既に第一次のスタインが踏査していたホータン地域以東では、1898年ロシアのクレメンツが調査したトルファンを除いて、最初に足跡をのこした探検隊でした。第二次隊の橘瑞超と野村栄三郎、第三次隊橘と吉川小一郎ですが、彼らは僧籍の有無にかかわらず西本願寺と深く関係していた人たちでした。そして光瑞が目的とした、「仏教東漸の経路を明らかにし、入竺求法僧の遺蹟をたずね、この地方で仏教が蒙った受難の経緯をさぐり、できれば様々な文化財を入手する」という、仏教徒としての探検目的にそって極めて忠実に行動しました。しかし英国のスタイン、ドイツのグリエンウエデルとル・コック、フランスのペリオなど、既に学者として名をなしていた諸外国の隊員にくらべて、10代、20代の若い日本の隊員には、ややキャリアが不足だったと言われます。

事実、報告書や記録の点では外国に劣ります。しかし仏教や漢文

敦煌出土 地藏菩薩水月観音図  
(藤井有鄰館)

の素養にとみ、常にきちんとした目的意識を持っていたことや、収集品の質の高さは、彼らが決して単なる冒険家ではなく、ものを見極める確かな目と、すぐれた感性を備えていたことが窺えます。ただ大谷探検隊は西本願寺の内部事情から、収集品をまとめて保存する機会を失いました。国家がバックアップして施行された外国の探検隊とここが違います。韓国のソウル、中国の旅順と今では分散してしまった大谷コレクションですが、今回展示されるのは国内に残ったものから選ばれています。

そのほか、第一次世界大戦に敗れて、迫りくるインフレのさ中に収集品の図録を出版し続け、その資金を補うために遂に収集品を売却するという手段をとらざるをえなかったドイツの、流出したコレクションの一部も陳列されます。その中の日本人洞の壁画は、キジルで大谷隊が行動した石窟を記念してドイツ隊が命名したのですが、大谷隊が切りとったあと置きざりにした壁画をのちにドイツ隊が発見して持ち帰ったもので、墨線を用いた厳しい顔だちに大谷隊の墨への郷愁を見る思いがします。

熱沙の砂漠から遠い道を運ばれ、集まり、そして散って行ったたくさんの方々の壁画たち、その背後には語りつくせないドラマがかくされているのです。

季刊 美のたより No.82

昭和 63 年 1 月 17 日

発行 大和文華館

クチャ出土 舍利容器(東博)



同 蓋部分 笛を吹く天使

